

北部九州の打製石器の石材利用

－石器石材の供給システム－

吉留秀敏

1. はじめに

北部九州における縄文時代の打製石器の研究は主に戦後に開始されるが、石器石材の供給とその背景の集団関係に関わる見解として中山平次郎氏の業績を忘れることは出来ない(中山 1931 他)。中山氏は弥生時代における水稻農耕の存在がなお未確定であった段階において、福岡市西区今山遺跡を丹念に踏査し、採集石斧やその未成品を基に大型磨製石斧の製作工程を四段階に還元し、磨製石斧製作址と広域の石斧供給を前提とした專業集団と社会の分業形態の存在を想定した。そしてその背景に農業社会の成立をも予測した。この石器製作過程を「工程」として研究することは、戦後に展開した弥生時代研究のみならず、各時代の石器研究に極めて大きな影響を与えたと言っても過言ではない。今山産石斧については後述するが、その後中山氏の弥生時代石器研究は、今山産石斧を下條信行氏、折尾学氏ら、立岩産石包丁を高島忠平氏らが継続している(下條 1973、1975a,b、折尾 1981、高島 1981)。また近年では山口讓治、米倉秀樹、柏原孝俊氏らが新たな成果を元に研究を進めている(山口 1995、米倉 1998・2005、柏原 2002)。

さて北部九州の縄文時代石器の研究は戦後になっても資料の蓄積が少なく、ようやく 1960 年代から開始される。石器石材から供給圏を探る隈氏の研究(隈 1960)や、腰岳産黒曜石による剥離技術やその分布圏などの検討(杉原荘介・戸沢充則・横田義章 1965)などを皮切りとする。1970 年以降には発掘調査が進み、横田義章、橘昌信、上敷領久、中村修身、小畑弘己氏らにより詳細な研究が行われた(横田 1976、橘 1977 a・b、1998、上敷 1989、中村 1990、小畑 2002a～c ほか)。

また、地域単位で縄文時代やその前後する時期を含めての通時的な石器石材利用の状況を検討するものとして、北部九州を吉留秀敏(1993)、東部九州を坂本嘉弘(1997)や小南裕一(1999)、西北部九州を福田一志(1999)が検討を行っている。

2. 北部九州の石器石材原産地

1) 剥片石器石材原産地

北部九州の縄文時代後～晩期の剥片石器石材としては、黒曜石と安山岩(サヌカイト)が主である。本地域の調査報告書によれば堆積岩であるチャートや石英などが筑前東部から豊前地域で僅かに存在するが、共伴関係の不明確な例が含まれ、また数量も少ないためにここではその検討を保留しておきたい。さて当時期の主な黒曜石原産地は佐賀県伊万里市の腰岳と、大分県姫島にある。これ以外に長崎県星鹿半島(通称「牟田産」と呼ばれる)や佐世保市針尾島産の黒曜石が存在するが、北部九州への供給は縄文早～前期を経て急激に減少している。当概期の原産地関連遺跡としては、この腰岳と姫島に限られると言っても良い。また安山岩(サヌカイト)については、佐賀県多久市鬼の鼻山山麓(茶園原、三年山等)や老松山等に多量に産出し、北部九州を中心に広域に供給されている。なお、近年腰岳周辺でも類似した石材の存在が確認され(山下 200□)、今後の化学分析等が待たれている。

2) 礫核石器石材原産地

剥片石器以外の打製石器を礫核石器としてあつかう。主な器種としては石斧、横刃石器などがある。石材には、玄武岩、安山岩(サヌカイト)、片岩類などがある。玄武岩は福岡市今山に産出し、北部九州に一定の供給圏を有している。縄文時代末から弥生時代に入る時期になると磨製石斧が製作され、その形態変化とともに供給量や供給圏が拡大する。この今山は玄界灘に面する博多湾の西端に位置する、標

高約 82m、元来周囲約 1.3km の小山である。第三紀の糸島閃緑花崗岩を貫入して噴出したアルカリ玄武岩を中心岩体とする独立丘であり、噴出時期は斬新世後半期の 300～250 万年前とされる。その後の侵食で南北二つの中央火口部が突出して残されたものである。山麓斜面は一部残された花崗岩基盤上に崩落した玄武岩風化破碎礫が大量に堆積している。現在は糸島平野の東端にあたるが、これは江戸期以降の干拓事業によるもので、それ以前は旧今津湾が大きく広がり山麓南東側まで干潟が迫っていた。なお今山と南部の今宿地区は海浜に形成された新砂丘で繋がり縄文時代以降は半島状をなしていたと復元されている。

3. 各遺跡の石材利用の様相

1) 剥片石器石材利用の地域的様相

まず北部九州を、隣接する内湾部に対応し西から次の三地域に区分して、石材の利用状況を概観する(図 2,3)。周防灘沿岸は、南を山国川、駅館川河口域、北を関門地域東岸とする。響灘沿岸は、東を関門地域北岸、西を遠賀川流域とする。玄界灘沿岸は、東を鐘ノ岬付近、西を糸島半島とする。それぞれの地域は海岸線上でみると直線で幅約 50km ほどの範囲である(図 1)。

なお記述上、遺跡内において石材組成中で最も量が多い石材を「第一石材」、二番目に多い石材を「第二石材」、量が僅少な石材を「第三石材」と呼ぶ。むろん遺跡個々での出土資料の絶対量に差異が大きく、厳密な区分や、呼称でないこと理解していただきたい。

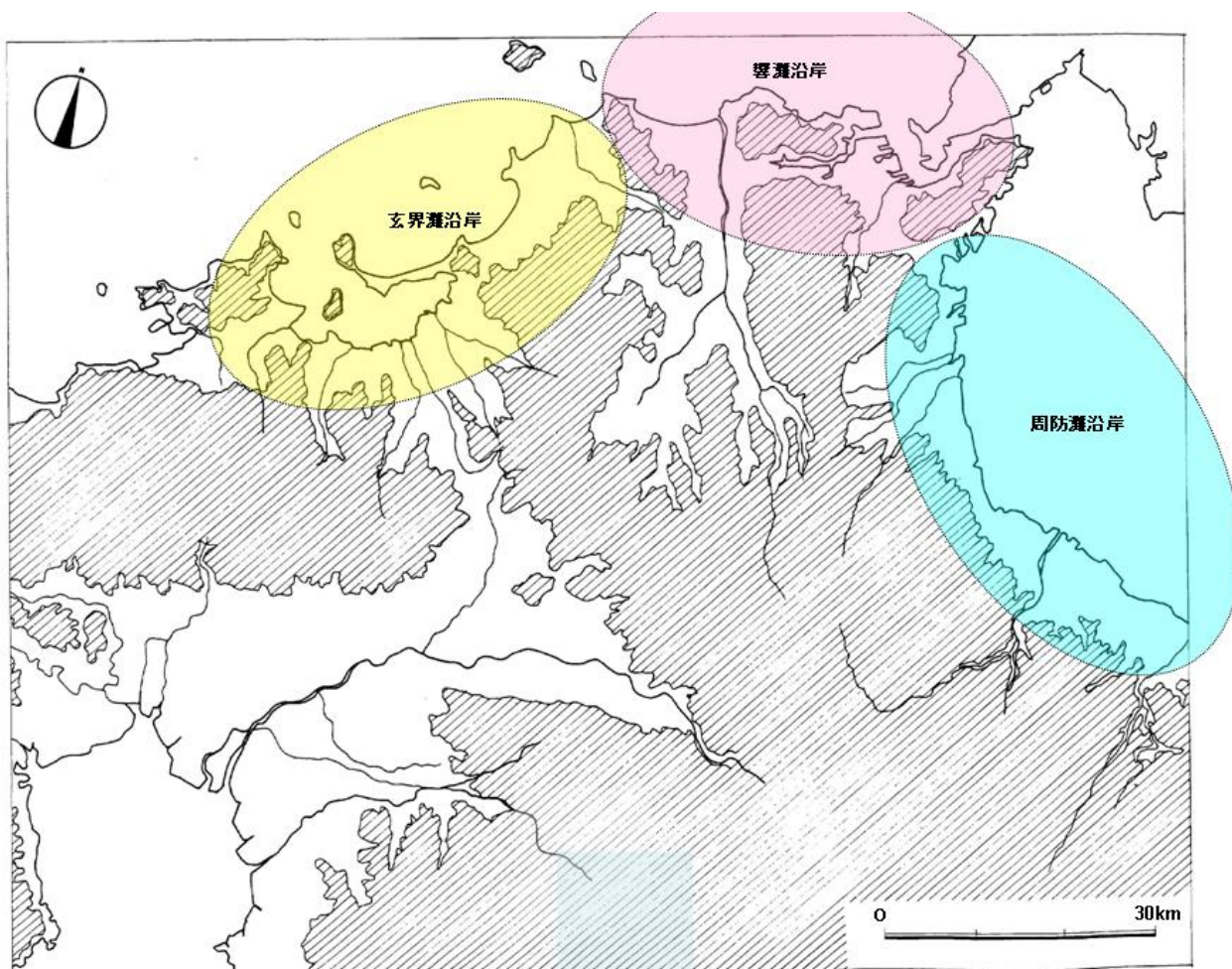


図1. 北部九州の地域区分

1、周防灘沿岸

縄文時代早期～前期は明確でないが、辻垣ヲサマル遺跡では鍬形鍬や長身の形態など本来早期～前期に伴う姫島産黒曜石の石器があり、この時期からの使用が予測される。

縄文時代後期後葉は勝円遺跡 C・G 区、下吉田遺跡などで姫島産黒曜石が第一石材で 8～9 割と主体を占め、第二石材として腰岳産黒曜石、サヌカイトが少量加わる石材構成である。晩期になると貫・井出ヶ本遺跡で姫島産黒曜石は第二石材へ後退し、2 割程度に減少する。かわってサヌカイトが第一石材となり 6 割弱に増加する。腰岳産黒曜石も 2 割程度となる。

2、響灘沿岸

この地域では縄文時代早期～前期については不明である。

遠賀川上流域の香春町湯牟田遺跡は縄文時代中期中葉の遺跡であり、姫島産黒曜石が 49% で第一石材、腰岳産黒曜石が 40% で第二石材、サヌカイトが 11% である。この遺跡は仲哀峠を越えると近距離で周防灘地域に達することが可能であり、下流域や海浜部は異なる様相を持っている。

縄文時代後期前葉において海浜部では腰岳産黒曜石とサヌカイトが第一石材と第二石材を拮抗しており、姫島産黒曜石は第三石材である。この姫島産黒曜石は山鹿貝塚で 1 割強、永犬丸貝塚で 2 割強と玄界灘沿岸に対してやや多い。同後期後葉になると、姫島産黒曜石は増加し、第二石材となる場合が多い。同時に腰岳産黒曜石の利用もやや増加し、海浜部で 3～4 割となる。海浜部から離れた遠賀川中～上流域では中期と同じく第 1 石材であり、全体の 6～7 割を占める。なおこの時期にサヌカイトの利用は狩尾池遺跡で 4 割強あるものの、他では激減し 1 割前後に落ち込む。

晩期に姫島産黒曜石は 1 割以下に減少する。それに対して腰岳産黒曜石が増加し、長行遺跡で 8 割以上の第一石材となり、サヌカイトも 1 割以下に減少する。

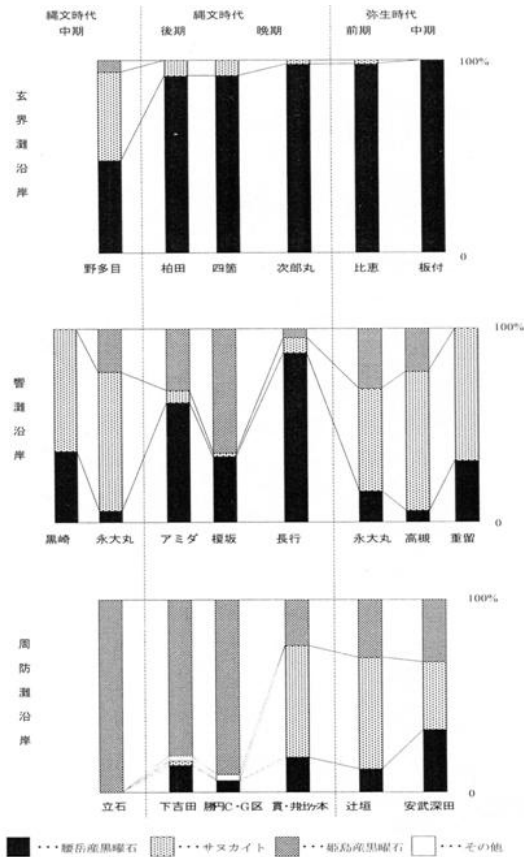


図2. 石材組成の地域区分

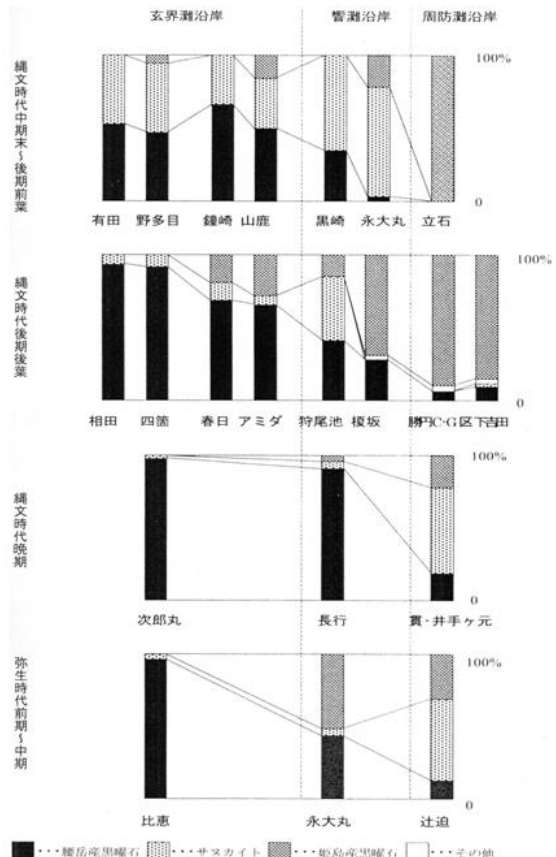


図3. 石材組成の時代区分

3、玄界灘沿岸

縄文時代早期～中期は黒曜石とサヌカイトの石材比率が拮抗する。早期には柏原遺跡において少量の姫島産黒曜石が認められるが、全体としては1%以下である。

早良区四箇遺跡 22 次では縄文時代中期前葉の鷹島式を伴う土壌、包含層がある。剥片石器類には石鏃、槍先、石匙、スクレイパー（搔器）石核、剥片類がある。姫島産黒曜石は第三石材であり、石鏃、剥片に利用され、剥片石器総数 139 点中 3 点である。石材の主体は腰岳産黒曜石（第一）とサヌカイト（第二）であり、前者は石鏃、後者は石匙、スクレイパーに偏った石材利用が見られる。

野多目遺跡では中期後葉～後期前葉の阿高式、坂の下式、中津式、福田 KII 式などを伴う流路、貯蔵穴、包含層などがある。石材はやはり腰岳産黒曜石とサヌカイトが拮抗し、姫島産黒曜石は四箇遺跡と同様に約 5% の第三石材であり、石鏃、石核、剥片などに利用される。

柏田遺跡の後期中葉、四箇遺跡の後期後葉の石器群などでは多量の剥片石器類が検出されているもの姫島産黒曜石は未検出である。両遺跡ともに第一石材の腰岳産黒曜石の利用が多く、剥片石器全体の 9 割前後となる。これ以降、腰岳産黒曜石への単一石材化の傾向が強まり、同晩期～弥生時代前期の次郎丸、比恵遺跡などでは 98～99% となり、弥生時代中期中葉の板付、四箇船石遺跡ではほぼ全て腰岳産黒曜石となる。

2) 北部九州の剥片石器石材組成の変遷

北部九州を三地域に区分して剥片石器石材組成の様相を概観した。その結果、地域ごとに異なる推移をたどることが明らかとなった。まず、玄界灘沿岸では中期までは腰岳産黒曜石とサヌカイトが拮抗して主体をなしているが、後期以降は腰岳産黒曜石が第一石材となり、時期を下がる毎にその増加が明確であった。それに対し、周防灘沿岸では中～後期に姫島産黒曜石が第一石材であり、少量の腰岳産黒曜石が搬入される状況であった。それが晩期以降になると一転し、サヌカイトが増加し、第一石材となる。また、両地域の間にあたる響灘沿岸では中期まではサヌカイトが第一石材、腰岳産黒曜石が第二石材であった。そして後期になると腰岳産黒曜石が増加し、第一石材となり、姫島産黒曜石が第二石材となりサヌカイトの減少が著しい状況であった。ところが、弥生前期以降は一転してサヌカイトの増加が認められる。このように、石材原産地を有する北部九州の西部からの流れとして、腰岳産黒曜石とサヌカイトの供給があり、後期以降は一貫して腰岳産黒曜石の増加という傾向を認めることができる。ところが、周防灘沿岸では晩期、響灘沿岸では弥生前期以降になるとサヌカイトの増加が認められる。科学的分析がなく厳密ではないが、玄界灘沿岸地域を經由した多久地域からのサヌカイトの供給とは考え難く、周防灘沿岸地域において瀬戸内系のサヌカイト石器器種の報告例もあることから、瀬戸内地域の金山産サヌカイトが供給された可能性が強いと考えている。なお、弥生前期以降の剥片石器の全体量は著しく減少し、その絶対量はけっして多くない。

4. 石器出土例

1) 原産地周辺遺跡群の様相

1、鈴桶遺跡（佐賀県伊万里市）

黒曜石原産地である腰岳北側山腹～山麓に立地する遺跡群である（図 4-1）。遺跡は標高 90～120m の緩斜面にある。1960 年(1 次)に明治大学、1984・1985 年(2 次)、1992 年(3 次)に伊万里市教育委員会による発掘調査が行われている。各調査では数千～数十万点という膨大な黒曜石製の石器類が出土したという(船井 2002)。何れも正式な報告書は未完であり、一部概要が示されている。それによると各調査地点に明確な遺構はなく、石器製作に関わる多量の黒曜石製の剥片、碎片、石核を主体に少量の石器と敲石などを

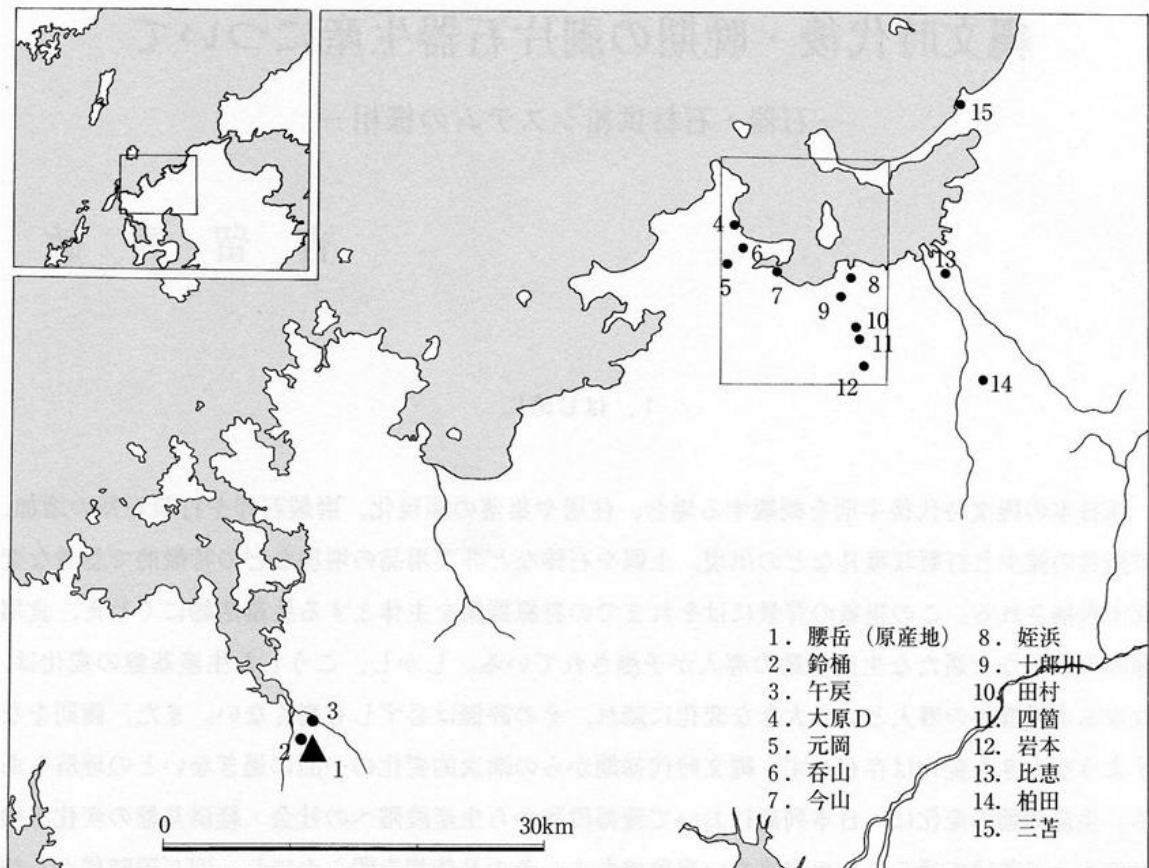


図4. 腰岳黒曜石原産地と玄界灘沿岸の主要遺跡

含む包含層が形成されていることが確かめられた。この遺跡は集落遺跡ではなく、石材採取、石器製作跡と考えられている。なお、1960年の調査資料の分析を通じて「鈴桶型刃器技法」が示され（杉原他1965）、当初は先土器時代の技術と推定された。しかしその後資料の蓄積を経て縄文時代の剥離技術と判明した（横田1976）。この技法については橘昌信(1979、1998)、上敷領久(1989)の検討があり、また小畑弘己が再検討をくわえ「鈴桶型石刃技法」の提唱を行っている（小畑2002a,b）。

2、午戻遺跡（佐賀県伊万里市）

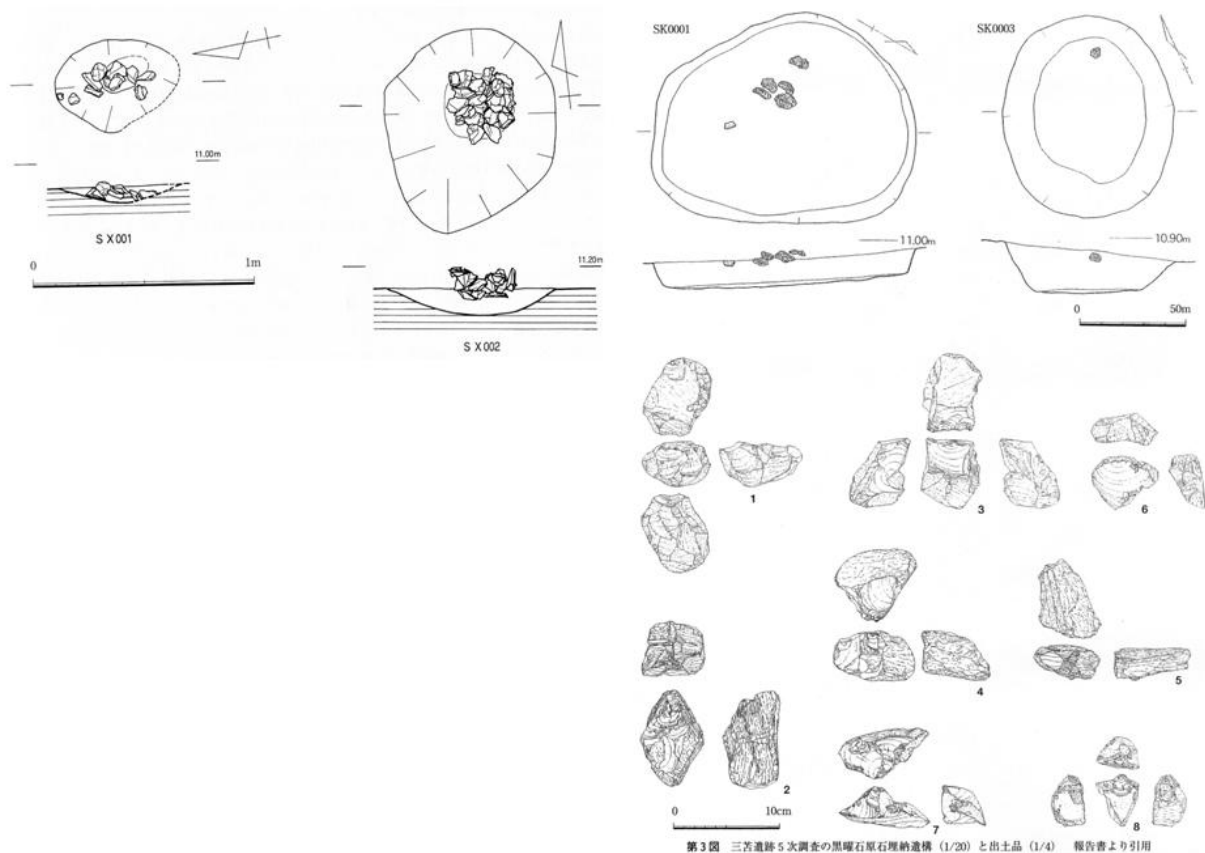
黒曜石原産地である腰岳北東約3kmの伊万里川左岸の丘陵上に立地する遺跡である。標高は9～12mである。1997～1999年に伊万里市教育委員会により発掘調査が行われた（荒谷他編2000）。弥生時代中期～後期の墳墓群と縄文時代後期後半～晩期前半の遺構・遺物が検出された。縄文期は三万田式から黒川式土器が出土し、遺構として石器製作跡が検出された（図5左）。遺構は石器群集中分布域3地点と原石・石核集石遺構2カ所が確認されている。集中分布域の石材は腰岳産黒曜石に限られる。集石遺構は浅い土壌に黒曜石原石と剥離初期の石核が集積状態で検出された。土壌は上部が削平されたとみられ下部のみの検出である。土壌SX001は平面楕円形の長さ約60cm、幅約40cm深さ6cmであり、6点の黒曜石が接するように出土した。土壌SX002は平面楕円形の長さ約90cm、幅約80cm深さ12cmであり、約30点の黒曜石が出土した。黒曜石は相互に隙間なく詰められており、上部の削平を考慮すると本来埋納された個体数はより多いはずである。これが本集落内での消費用と見るかは厳密な検討の必要がある。土器類が少なく、遺存する石器類の数量からみても、本集落内での消費量を上回る原石が備蓄されている可能性は高い。

2) 遠隔地遺跡群の様相

1, 三苦遺跡 5 次調査地点 (福岡市東区)

三苦遺跡は海の中道東側の丘陵地帯にあり、和白川の浸食を受けた古砂丘後背斜面に展開する集落遺跡である(中村・本田編 2003)。標高は 2~12m である。本遺跡では旧石器時代から縄文、弥生、古墳時代の断続的な利用が認められる。5 次調査で縄文時代後期後葉三万田式期の遺構として黒曜石原石を埋納した土壇 2 基が検出された(図 5 右)。土壇 SK0001 は平面楕円形であり、長さ 1.2m、幅 1m、深さ 0.15m を測る。上部に黒曜石原石 7 点が集中状態で出土した。原石は大きさに A、B の二群に区分できる(図 1)。A 群(1~5)は大型で長さ 6~9cm、幅 5~7cm、厚さ 4~5cm を測り、重量は 110~270g 程である。全ての長軸の一端に 1~数回の小剥離がある。この小剥離については、これまで産地において石材採取者が石材材質を確認する「試し打ち」(2)と認識されてきたものである。B 群(6、7)は中型で長さ 6~9cm、幅 4~5cm、厚さ 3~4cm を測り、重量は 70~80g である。何れも大きなネガティブの剥離面をもち、分割された素材である。土壇 SK0003 は平面楕円形であり、長さ 1m、幅 0.8m、深さ 0.3m を測る。上部に 1 点の黒曜石原石が出土した。原石は長さ 5cm、幅 4cm、厚さ 3cm ほどであり、重量は 50g 弱である。両土壇ともに上部が削平されており、調査者は本来より多くの原石が埋納されていたと推測している。

本遺跡は博多湾に注ぐ和白川最上流部にあるが、北側の湊川水系と低丘陵による分水嶺で接する位置にある。自然科学分析によると本遺跡の約 100m 南側の和白川沿いの沖積地下 2~3m (標高 -1~2m) に内湾性貝化石が検出され、C14 年代測定で $3430 \pm 80y. B.P.$ 、 $3610 \pm 140y. B.P.$ 、 $4030 \pm 70y. B.P.$ の数値が示されている(久住編 1998)。本地域の縄文海進のピークは約 4700 年前で海面上昇値 +2.2m とされる(下山 1994)。つまり縄文時代後期前半までは本遺跡のすぐ南側まで博多湾北端の和白干潟の拡大があ



第3図 三苦遺跡5次調査の黒曜石埋納遺構 (1/20) と出土品 (1/4) 報告書より引用

図5. 午辰遺跡と三苦遺跡の石材埋納遺構

ったことが分かる。

縄文海進後の砂丘形成と後背湿地の様相から本集落の活動領域や関連集落の範囲は和白川流域だけではなく、湊川流域を含めた立花山北～西側一帯を予測する。縄文時代後期の周辺遺跡はなお明確でないが、東側約 0.5～1.5km の標高 30m 前後の丘陵地帯にある永浦遺跡や下和白遺跡、東約 3km の湊川流域の夜白・三代遺跡群に該期の石器類の出土が知られている(吉留編 1996)。

2、元岡遺跡群 28 次調査 (福岡市西区)

元岡遺跡は博多湾西端にあり、糸島半島南側の今津湾に面する丘陵先端に位置している。調査地点の標高は約 20m であり、縄文時代後期の元岡瓜尾貝塚の西側約 100m に位置し、周辺に同時期の遺物が分布することから同じ集落内とみられる。貝塚並びに本調査区の南側低地は現在水田地帯であり標高 3～5 m を測るが、縄文海進ピーク時の今津湾の海岸線は遺跡の直下にあったと考えられる。

本遺跡では調査地内の自然流路斜面の包含層から黒曜石原石 8 個が集中出土した(屋山 2006)。明確な遺構は不明であるが、検出状況から本来一括埋納状態であったと見られる。黒曜石はこぶし大以下の角礫であり、重量は 50～170g であり、一端に小剥離がみられる。肉眼では腰岳産黒曜石とみられた。

3、大原 D 遺跡 3 次調査地点 (福岡市西区)

大原 D 遺跡は博多湾西端にあり、糸島半島の付け根に位置する。本遺跡は、大原海水浴場の後背部に当たる山裾の狭い丘陵と低地部からなる遺跡である。標高は 5～20m である。縄文時代草創期から本遺跡の主体をなす後期末から晩期中頃まで縄文時代各時期を通じて利用される希有な遺跡である。後期後半～晩期前半には山裾の斜面に焼き畑の可能性が指摘されており(山崎 2003)、同時期の扁平打製石斧や黒曜石石器類の多量出土が目される。第 3 次調査による黒曜石石器類の総量は数万点に達するとみられる(加藤他編 1996)。特に石器類の出土が多い低地部では時期により集中部が異なり、6-1 区は晩期中頃、6-2 区は後期末葉、8-1・4 区：後期末から晩期前葉が主体となるという。これらの剥片石器の内容についての詳細な内容は未報告であるが、低地部のうち 8、10 区の石器点数についてのみ示してある。その時期は共伴土器類から後期後半から晩期前葉とやや幅があるものの、剥片石器総数で 10,746 点がカウントされている。その内訳は石器 1,035 点(9.6%)、剥片 (Flake、Blade・折断剥片を含む) 3,817 点(35.5%)、碎片(Chip)4,772 点(44.4%)、石核 708 点(6.6%)、石核調整剥片 410 点(3.8%)、原石 4 点(0.1%) である。また、石器 1,035 点の内容は、石鏃(未製品含む)655 点(63.3%)、スレイパ^レ類(U・Flake 含む)311 点(30.0%)、その他 69 点(6.7%)である。

この資料のなかで 8-3 区にある、晩期前葉を主体とし比較的まとまった遺物を出土した河川跡 SX01 の剥片石器類について埋蔵文化財センター保管資料を再調査した。その遺物量は 8、10 区全体のおよそ三分の一にあたる 3,521 点、17,152 g である。これは 3 次調査全体の中で 2 割程度である。

この河川跡出土の剥片石器類を石材別に点数と重量をみると、腰岳産黒曜石 3,450 点(98%)・16,329 g (95%)、サヌカイト 70 点(2%)・810 g (5%)、姫島産黒曜石 1 点(0%)・13 g (0%)である。この時期に剥片石器石材の中で腰岳産黒曜石が 9 割前後と圧倒的となることは既に指摘した(吉留 2002)が、この遺跡ではさらにその傾向が強いことが分かる。

腰岳産黒曜石のみを見ると、原石 6 点(0.2%)・260 g (1.6%)、石核 243 点(7.0%)・2,889 g (17.7%)、剥片、碎片類 3,163 点(91.7%)・13,077 g (80.1%)、石器 38 点(1.1%)・103 g (0.6%)である。

原石について河川検出時の 1 点を加えた 7 点を観察した。大きさで A～C の三群に区分できる(図 6)。A 群(1～3)は大型で長さ 6～9cm、幅 4～5cm、厚さ 2～3cm を測り、重量は 50～100g 程である。B 群(4,5)は中型で長さ 4～6cm、幅 4cm 前後、厚さ 1～2cm を測り、重量は 30g 前後である。C 群(6,7) は小型であり、長さ 4cm 以下、幅 3cm 以下、厚さ 2cm 以下であり、重量は 10g 前後である。全ての長軸の一端に 1～数回の小剥離がある。さて A 群はやや厚みが不足するものの、三笠遺跡 B 群素材に近い法量である。しかし、B 群は厚さ 1cm 強の板状石材(4)や L 字形に屈曲した形状(5)であり、連続的な剥片

剥離は不可能であり、そのままの石器素材としても利用困難な原石である。さらに C 群は小さすぎるために剥片石器の素材としての利用が困難である。

4、田村遺跡第3地点 SX31 他（福岡市早良区）

本遺跡は早良平野のほぼ中央に位置し、著名な四箇遺跡の北側約 500m に有る。沖積地内微高地という同様の地理的条件に立地する遺跡である。海岸からの 15m である。第3地点の溝状遺構 SX31 に縄文時代後期末の三万田Ⅲ式期の包含層が形成されており、総数で 502 点の石器、剥片類が出土した。内訳は石器 154、剥片・碎片 329、石核 16、原石 3 である。

石材を見ると石鏃が古銅輝石安山岩 10 点と過半数に達する以外、他は黒耀石が 9 割を越える率となっている。剥片・碎片の重量比は黒耀石が古銅輝石安山岩の 17 倍と報告されている。

原石 3 点は古剥離面のある素材(8)と、熱破砕ある原石(9)がある(図6)。何れも長さ 3cm 以下、幅 2cm 以下、厚さ 2cm 以下であり、重量は 10g 以下である。田村遺跡の C 群に対応する。全ての長軸の一端に 1～数回の小剥離が認められる。

5、岩本遺跡群第3次調査地点（福岡市早良区）

早良平野南東部の油山山麓の低位段丘上に立地する。海岸からの距離は約 8km であり、標高は 30～32m である。山麓に近い沖積地内微高地間の低地に形成された遺物包含層からの出土遺物である。小規模の遺跡であり、主体は晩期前葉に相当する時期である。

剥片石器は 110 点があり、石器 6、剥片 41、碎片 61、石核 1、原石 1 がある。

石材は全体で黒耀石 104 点、古銅輝石安山岩 6 点であり、後者には碎片の出土がない。石鏃には剥片鏃が 1 点有る。この剥片鏃や削器には「鈴桶型石刃技法」と関連する素材の利用があるが、剥片、碎片を見る限り少なくとも本遺跡でのこの剥離技法は存在しない。

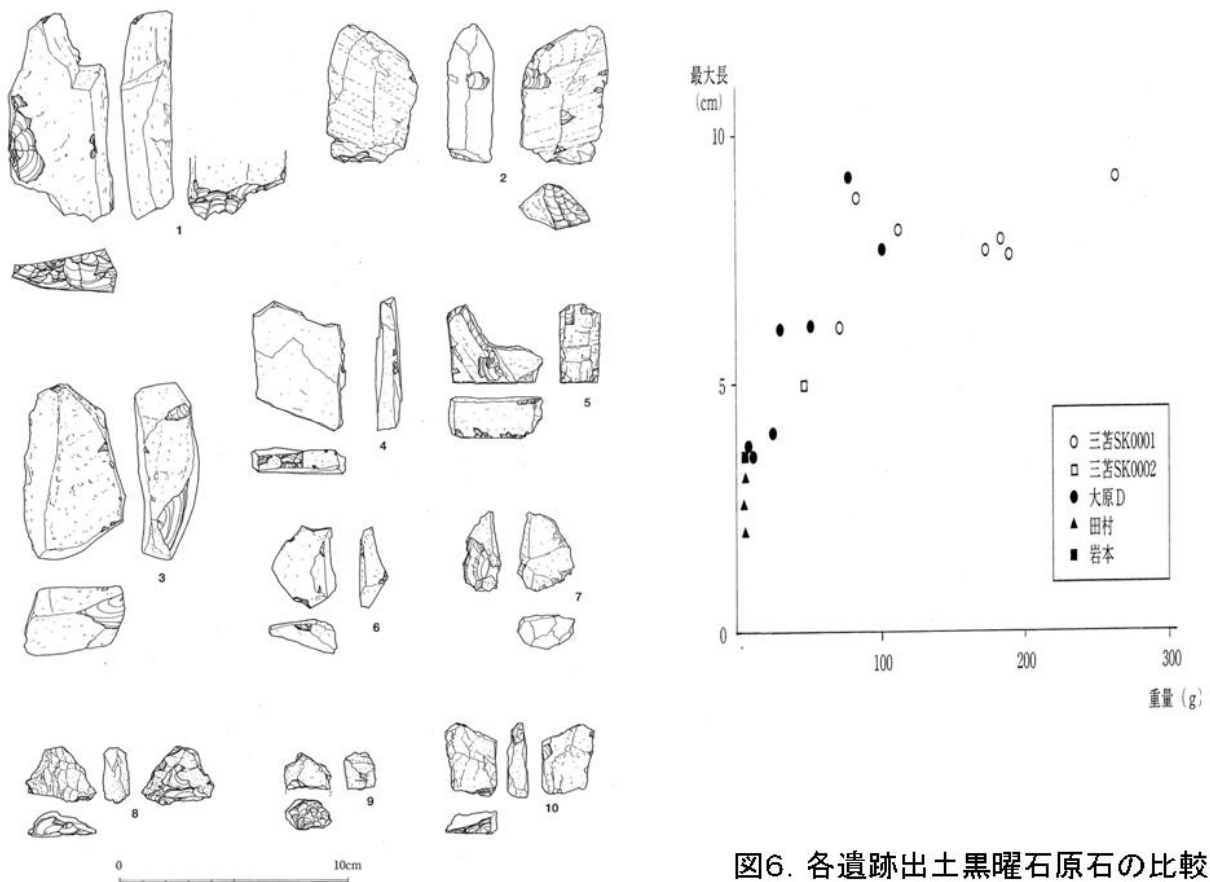


図6. 各遺跡出土黒耀石原石の比較

原石(11)は長さ約 3cm、幅約 2cm、厚さ約 1cm 以下であり、重量は 7g である (図 6)。田村遺跡の C 群に対応する。長軸の一端に数回の小剥離が認められる。

2) 海浜部遺跡と内陸部遺跡

剥片石器石材の様相を探る目的で黒曜石原産地の腰岳周辺遺跡と供給地の一例として博多湾岸遺跡を概観した。その結果、縄文時代後期後半から晩期前半の剥片石器石材供給に関わる幾つかの事象を明らかにできた。

まず、後期後半期には原石埋納遺構が認められた。原産地に近い午戻遺跡では多量の原石が埋納されているが、博多湾岸で原石埋納遺構が認められるのは海浜部集落のみである。三笠遺跡や元岡遺跡では数個～十数個という少量の埋納がある。原石の大きさは何れの埋納遺構でもこぶし大を中心としている。こうした海浜部集落での石器製作作業は他の集落に比較してけっして多いものではない。内陸部では拠点集落と周辺集落で石器類の保有量の較差があるものの、埋納遺構は認められず、石器製作という消費行為のみが認められる。内陸部の代表的拠点集落としては早良平野の四箇遺跡、福岡平野の柏田遺跡などがあり、多くの石器生産が認められる(小池編 1977、二宮編 1981 など)。この時期の海浜部集団は原石や製品を各地に供給する上で原産地との中継点としての役割を担っている。

ところが晩期前葉になると、海浜部集落では不良品を含む少量の原石の散在が認められたものの、埋納遺構は未検出である。また特徴的事象としてこうした遺跡内でも多量の石器製作が行われるようになる。大原 D 遺跡では調査区内のごく小範囲だけでも数十 kg の黒曜石残滓が出土している。しかし剥片石器類全体の中での完成された石器類は少なく、同遺跡 8-3 区河川ではわずかに 0.6%であった。これに対し同時期の内陸部遺跡である田村遺跡や岩本遺跡では、まず剥片石器類全体量が少ない。石器製作作業は認められるが、定形石器類の中には完成品として搬入されたものも含まれるものとみられた。また遺跡内での石器の比率は比較的高く、5～30%を占める (図 6)。こうした背景には縄文時代後期までの様相とは明らかに異なる石器の供給、消費形態が考えられる。

6. おわりに

1) 剥片石器石材の供給形態

ここでは剥片石器の石材として利用された腰岳産黒曜石について、原産地から集落への供給状況を検討し、地域間の生活資材の流通システムを検討したい。とくに海浜部集団による海上運搬による石材流通ルートや構造を検討したい。縄文時代の北部九州産石材は、北部九州から南九州、そして朝鮮半島南部を含む広範囲への供給があり、その範囲、供給量は時期を経て変動している。そうしたなかに見いだせる画期から社会的、経済的側面を照射することが出来ると考えている。縄文時代から弥生時代へ生業の変化と、食料生産に関わる新たな技術の導入などがあり、その背景に次第に頻度を増す「フネ」による交易を予測する。これらが次なる社会変革の胎動をもたらした重要な要件と考えるからである。

九州では各時期を通じて海浜部遺跡と内陸部遺跡に石材保有量の較差が認められる点は注意される。すでに著者は九州北部から豊前地域の剥片石材の流通について石材種別の検討を行い、玄界灘沿岸の貝塚遺跡などの海浜部遺跡に広範囲の類似した石材比率があることを示した。また流域ごとの内陸部集落に海浜部を基点とする石材組成の地理的勾配を認めた。そのことは海浜部集落が原産地からの石材供給に直接関わり、内陸部集落への供給を行ったと予測した(吉留 1998)。

では北部九州においてこうした石材流通の主な担い手となるのは原産地集落、海浜部集落のどちらの集団であろうか。両遺跡において原石などの石材埋納量に差があり、原産地側が圧倒的に多い事実がある。これは原産地集落での石器生産が多いことか、集落内での消費量以上を備蓄しその後他集団に供給することを示している。前者の場合、腰岳周辺の有田川、伊万里川流域、そして伊万里湾沿岸に予測

される有効な集団領域は、周囲に迫る山稜にはさまれけっして広いものではない。そこに定住する集団数も多くを想定できない以上、本地域内での石材消費量を他地域に対し多く見積もることは困難であろう。後者のように他集団への供給を予測する場合、この地域の主要労働力が遠隔地まで頻繁に交易活動に従事していたとも考え難い。こうした点からみると、北部九州の石材供給・運搬に関わるのは原産地の集団ではなく、各地の海浜部集落の集団と考えられる。海浜部集落の生業形態や重量のある石材を運搬することを考慮すれば海浜部集落ごとに「フネ」を利用し、伊万里湾に入り、原産地周辺集団から石材を入手する。そして入手した石材を自らの海浜部の集落へ持ち帰り、一部は自己消費、それ以外は再備蓄や内陸部集団へ供給するとの状況が考えられる。

それでは鈴桶遺跡や大原 D 遺跡などの海浜部集落での多量の石器製作をどう理解すべきであろうか。それらの遺跡では集落内での消費を遙かに上回る量の石器生産が行われている。原産地での膨大な石核、剥片類は、豊富な原石を背景とし、多量の石器生産が予測できる。博多湾岸の三笠遺跡や元岡遺跡など縄文時代後期後半段階の海浜部集落ではこうしたあり方を認めることはできない。しかし晩期以降になると先の大原 D 遺跡以外にも十郎川遺跡などでこうした様相が認められる。原産地や晩期以降の海浜部集落での石器組成は石核、碎片など石器生産の残滓が主体であり、完成品の石器類は極めて少ない。生産された石器や、その素材としての剥片類も多くが他集落へ供給されたと考えられる。つまり、原産地や晩期以降の海浜部集落から供給されるのは原石だけでなく、石器や剥片も存在したのである。基本的には運搬において重量のかさむ原石より完成品や素材剥片のほうが有利であり、後の製作作業も省くことができるために有効であろう。しかし完成品は生産工程を通じてある種の付加価値を有していたことは当然であり、その入手過程において原石とは異なる対象物となっていた可能性がある。

また晩期には利用困難な不良品とでも言える小さな原石が供給先となる各所の遺跡で認められた。この時期には利用される原石の小型化が進むことは既に明らかにした。しかし、このように極めて小さな原石が海浜部集落だけでなく、少量とは言え、内陸部の集落まで及ぶ点には注意が必要である。

縄文時代後・晩期の剥片石器生産について腰岳産黒曜石の供給形態の検討を行った。西北部九州産の黒曜石は縄文時代前・中期段階に九州島内だけでなく、朝鮮半島南部へも供給されるが、後期には減少しやがて認められなくなる。その背景は別に考察されるべきであるが、この時期以降、石材の供給は北部九州から南九州など九州島内の広範囲へ拡大が見られる。今回北部九州に限ってその具体相の検討を行った。その結果、各地の海浜部集団による「フネ」を利用した運搬、流通形態を予測した。また、後期から晩期に間に石器生産形態や流通の変化も予測した。こうしたあり方はモデルとして取り上げた博多湾岸以外でもあり得ることと考え、こうした海浜部集団の広域な活動がさまざまな物資入手や生産技術の拡大、流通機構などの変化をもたらしたと考えている。

このような生産資材の供給形態としては、縄文後期から弥生前期に及ぶ今山産玄武岩を用いた扁平打製石斧類があり、同石材による弥生前期から同中期に北部九州の広域に流通する太形蛤刃石斧なども連鎖していると考えている。今山産玄武岩製石斧については中山平次郎などにより研究初期から専門集団の存在が指摘されていた(中山 1931)。この玄武岩原産地が大原 D 遺跡に近接する位置にあることも示唆的である。さらに弥生前期以降の大陸系磨製石斧類の製作跡が比恵遺跡や姪浜遺跡など各平野の海浜に近い遺跡に確認され、素材入手や生産、流通などの重要な役割を担うことも、その後の海浜部集団の動向を示していると考えられる。やがて金属器類やその素材入手にあたって海上運搬による流通が想定される以上、本地域で交易に長けた海浜部集団の関わりを考えるべきである。また海浜部集団の中でも韓半島に最も近い位置にあり、後背地域として伊都、早良、福岡から筑後に広がる広い平野を有している博多湾岸の集団こそが、新たな資材の流通において最も優位な条件を有していたことは疑いない。

また、北部九州での姫島産黒曜石の利用は、縄文時代早期後半(押型文土器)期にはじまると見られる。ただし最も供給範囲と量を増すのは縄文時代中期から後期前葉の間である。しかしこの石材が剥片

石器の中で主体となり第一石材をなすのは周防灘地域のみであり、より東方の響灘から玄界灘地域では腰岳産黒曜石、サヌカイトに次ぐ、第三石材として一割以下の利用を認めるに過ぎない。周防灘沿岸では後期後葉でも第一石材としての位置を保つが、同晩期には金山産と推定したサヌカイトの利用が増し、姫島産黒曜石は第二石材に後退する。

このように海浜地域における集落の石材組成の傾向は明快である。かつて玄界灘沿岸地域の海浜部遺跡の石材組成について、海路を通じた西北九州からの石材の供給システムを予測したことがある（吉留1998）。この供給システムは原産地集団による直接的な交易ではなく、海浜部集団が原産地周辺集団と交渉により石材を確保し、各地域の集団へ二次的に供給すると考えた。

ところで北部九州では河川上流域など内陸部に入ると、やや異なる剥片石器石材の様相が認められる。縄文時代中期以降、遠賀川上流域では姫島産黒曜石の利用が多い。また弥生時代でも僅かではあるが、太宰府市前田遺跡に認められる。姫島産黒曜石が北部九州各地の内陸部により多くもたらされた背景は明確でないが、海浜部からの供給ルートとは異なる石材供給ルートの存在を考慮する必要がある。地理的には姫島から周防灘地域に達し、京都・田川地域を経て筑豊地域を横断する陸路が予測される。このルートは古代においても官道があり、人的・物的交流はより古くより行われていたことを考慮する必要がある。ただし縄文時代晩期以降は各地の剥片石器石材の一次石材は海浜部からの供給となり、こうした内陸ルートによる石材供給は不足を補う二次的な存在となったと考えられる。図7ではこうした北部九州の石材供給ルートを概念的に示した。ただし沿岸沿いの海上ルートに縄文時代後期まで存在したサヌカイトの供給を省いていることや、通時代的に示したため、時代ごとの供給量の増減が表現されていないことは注意されたい。

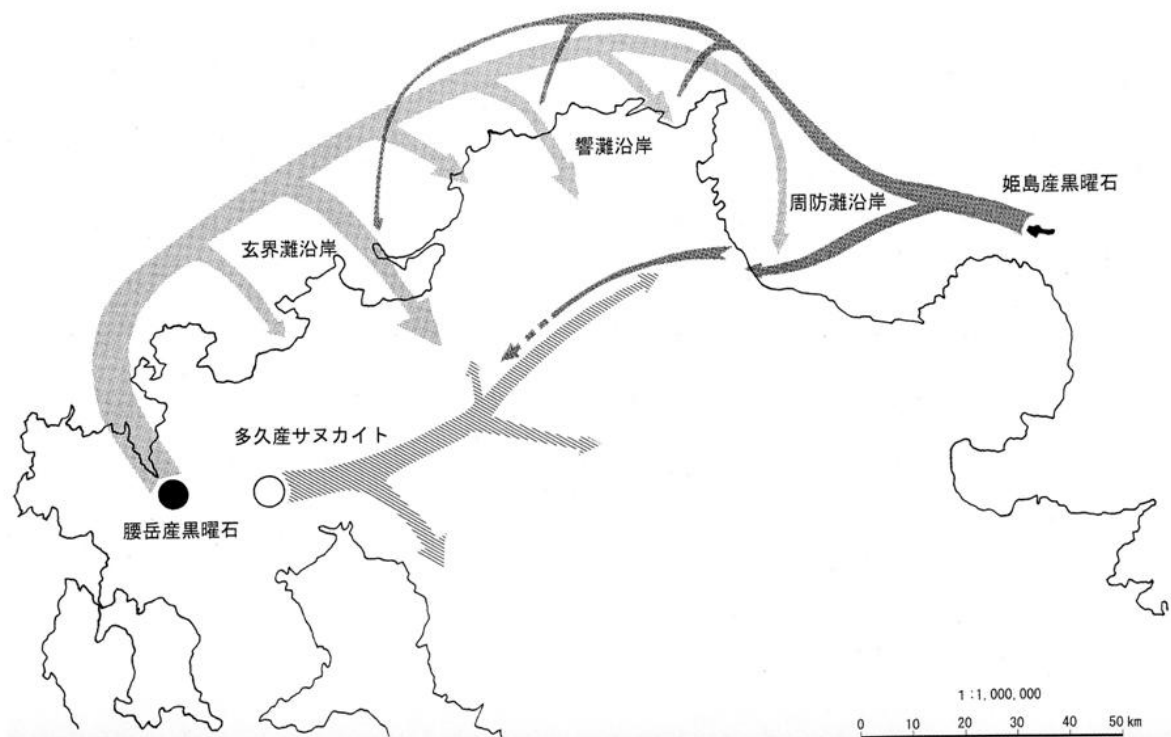


図7. 縄文時代中期～晩期の剥片石器石材の供給ルート概念図

参考文献

- 小畑弘己 2002a 「縄文時代の石刃－鈴桶型石刃技法について－」（『青丘学術論集』, 20, 2002年 a, 59-82頁）。
- 小畑弘己 2002b 「鈴桶技法の再検討－西北九州縄文時代の石刃技法－」（『日本考古学協会第68回総会研究発表要旨』, 2002年 b, 41-44頁）。
- 小畑弘己 2002c 「鈴桶遺跡と鈴桶技法について」（『石器原産地研究会会誌(Stone Sources)』, 1, 10-13頁）。
- 小畑弘己 2003 「九州腰岳原産地と鈴桶遺跡を巡る諸問題」（『黒曜石文化研究』2 明治大学黒曜石研究センター 169～183頁）
- 賀川光夫 1967 「縄文晩期農耕の一問題－いわゆる扁平石器の用途－」（『考古学研究』第13巻第4号（通巻52号））
- 柏原孝俊 2002 「北部九州における弥生時代磨製石斧の一樣相－集落遺跡出土の「今山産石斧」とその供給形態－」（『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』上巻, 古代吉備研究会 pp 521-537）
- 上敷領久 1989 「縄文時代の剥片石器製作技術－特に中・西北九州地方について－」（『物質文化』, 52, 物質文化研究会, 1989年, 22-38頁）。
- 久住猛雄 2007 「「博多湾貿易」の成立と解体－古墳時代初頭前後の対外交易機構－」（『考古学研究』第53巻第4号（通巻212号））
- 隈昭志 1960 「石器材料の石質からみた需要圏－本州西端及び北九州の場合」（『考古学研究』第7巻第1号（通巻25号））
- 小南裕一 1999 「縄文後・晩期石器研究ノート」（『研究紀要』第13号 財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 PP1～18）
- 小南裕一 2006 「鈴桶技法の終焉－北部九州地域を中心として－」（『陶埴』山口県埋蔵文化財センター PP21-40）
- 坂本嘉弘 1997 「東北九州における石器組成の変遷－縄文時代後期から古墳時代にかけて－」（『おおいた考古』第8集 PP1～39）
- 下條信行 1973 『今山遺跡（1）－石斧製作の開始期と遺跡の現状について－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第22集
- 下條信行 1975a 「北九州における弥生時代の石器生産」（『考古学研究』第22巻第1号（通巻85号））
- 下條信行 1975b 「未製石器からみた弥生時代前期の生産体制」（『九州考古学の諸問題』）
- 下山正一 1994 「北部九州における縄文海進以降の海岸線と地盤変動傾向」（『第四紀研究』, 33, 351-360頁）
- 杉原荘介・戸沢充則・横田義章 1965 「九州における特殊な刃器技法－佐賀県伊万里市鈴桶遺跡の石器群－」（『考古学雑誌』, 51巻3号, 日本考古学会, 1-24頁）。長家伸編 1994 「鋤崎遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第388集
- 高島忠平 1981 「立岩産石庖丁の生産と流通－北部九州農耕社会の成立を背景として－（要旨）」（『考古学研究』第27巻第4号（通巻108号））
- 竹広文明 1988 「中国地方縄文時代の剥片石器」（『考古学研究会』, 35巻1号, 考古学研究会）
- 竹広文明 1993 「縄文時代の石器原材獲得－金山産サヌカイトをめぐる－」（『考古論集－潮見浩先生退官記念論集－』）
- 橘昌信 1977 a 「西北九州における黒曜石製の縦長剥片についての一考察」（『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第4集, 福岡県教育委員会, 227-235頁）
- 橘昌信 1977b 「縦長剥片－西北九州における縄文時代の石器研究－」（『史学論叢』, 9, 別府大学, 75-93

頁)

橘昌信 1998「縄文時代における剥片石器生産とその構造—腰岳産黒曜石の石器生産・流通と専門的集団—」(『網干善教先生古希記念考古学論集』上巻)

谷若倫郎 1997「瀬戸内の物流の原形—金山産サヌカイトの移動をめぐって—」(『古文化論叢—伊達先生古稀記念論集』PP40～50)

土屋みづほ 2004「弥生時代における石器生産と流通の変遷過程—東北部九州を中心として—」(『考古学研究』第50巻第4号(通巻200号))

中村修身 1990「縄文時代の生産と流通—道其の材料としての黒曜石を例に—」(『考古学研究』第37巻第3号(通巻147号))

中山平次郎 1931「今山の石斧製造所址」(『福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書第6号』)

浜田昌治 1980「今山遺跡5・6地点発掘調査を終えて」(『地域相研究』地域相研究会)

船井向洋 2002「腰岳とその周辺の発掘調査による黒曜石研究の歩みについて」(『石器原産地研究会会誌(Stone Sources)』, 1, 石器原産地研究会, 1頁)

福田一志 1999「『』

山口讓治 1995「北部九州の大陸系磨製石斧」『考古学ジャーナル』391 pp4～8

山崎真治 2008「先史時代における腰岳系黒曜石の流通と画期」(『博物館紀要』第1号 沖縄県立博物館・美術館 PP27～34)

山崎純男 2003「西日本の縄文後晩期の農耕再論」(『日韓初期農耕—関連学問と考古学の試み—』大阪市学芸員等共同研究シンポジウム発表要旨, 65-85頁)。

山村信栄 1987「磨製石斧について」(佐藤一郎編 1987『青木遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第169集 PP37-39所収)

横田義章 1976「西北九州における縄文時代の一剥片石器群」(『九州歴史資料館研究論集』, 2, 九州歴史資料館)

吉留秀敏編 1993a「共伴石器について」『岩本遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第342集

吉留秀敏 1993b「縄文時代後期から晩期の石器技術総体の変化とその評価—早良平野を中心に—」(『古文化談叢』第30集(上)PP137～164)

吉留秀敏 1998「縄文時代後期から晩期の石器素材の流通—北部九州の交流史として—」(『第9回中四国縄文研究会発表資料 本州西部地域における文化交流の諸問題』中四国縄文研究会)

吉留秀敏 2002a「北部九州弥生時代中期の剥片石器」(『究班』II 埋蔵文化財研究会)

吉留秀敏 2002b「北部九州の剥片石器石材の流通(縄文時代後期～弥生時代)」(『Stone Sources』1 石器原産地研究会 pp63～65)

吉留秀敏「北部九州における姫島産黒曜石の流通」(『石器原産地研究会会誌(Stone Sources)』石器原産地研究会)

吉留秀敏 2004「縄文時代後・晩期の剥片石器生産について—石器・石材供給システムの様相—」(『考古論集』河瀬正利先生退官記念事業会 PP231～244)

参考・引用報告書等

荒谷義樹他編 2000『午辰遺跡』伊万里市教育委員会

井澤洋一 1984「今山遺跡～昭和59年度調査」現地説明会パンフレット 福岡市教育委員会

井澤洋一編 1994『今宿遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第389集

井澤洋一編 1995『桑原遺跡群—第1次調査—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第432集

井澤洋一編 1996『桑原遺跡群2—飛櫛貝塚第1次調査—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第480集

池田祐司 2001『周船寺遺跡群4』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 692 集

宇野慎敏編 1996『高槻遺跡第 8 地点』北九州市埋蔵文化財調査報告書第 192 集 北九州市教育文化事業団

宇野慎敏編 1997『永犬丸遺跡群 1』北九州市埋蔵文化財調査報告書第 206 集 北九州市教育文化事業団

宇野慎敏編 1998『小倉城下屋敷』北九州市埋蔵文化財調査報告書第 222 集 北九州市教育文化事業団

大庭康時 1993『野多目渡遺跡 4』福岡市教育委員会

緒方 泉編 1992『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告— 6 —』福岡県教育委員会

折尾学編 1981『今山・今宿遺跡— 玄海自転車道建設に伴う遺跡の調査—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 75 集

加藤良彦・常松幹雄・屋山洋他編 1996『大原 D 遺跡群 1』福岡市教育委員会。

木下修・水之江和同編 1991『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告— 4 —』福岡県教育委員会

久住猛雄編 1998『三笠遺跡群 3 — 第 4 次調査報告—』福岡市教育委員会

小池史哲編 1977『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第 4 集福岡県教育委員会

佐々木隆彦編 1999『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告— 53 —』福岡県教育委員会

佐藤一郎編 1987『青木遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 169 集 (中期中葉)

茂 和敏他編 2005『山田西遺跡群Ⅳ』那珂川町文化財調査報告書第 66 集

杉原敏之 1994「(3)石器」『辻垣島田・長通遺跡』一般国道 10 号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第 2 集 福岡県教育委員会

関野康一編 1998『冷水遺跡第 2 地点』北九州市文化財調査報告書第 73 集 北九州市教育委員会

谷口俊治編 1999『重留遺跡第 2 地点』北九州市埋蔵文化財調査報告書第 230 集 北九州市教育文化事業団

中村啓太郎・本田浩一郎編 2003『三笠 4 — 三笠遺跡群第 5 次発掘調査報告—』福岡市教育委員会

長家伸編 1996『姪浜遺跡 2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 478 集

二宮忠司編 1981『四箇周辺遺跡調査報告書(4)』(福岡市教育委員会)。

二宮忠司編 1991『今宿五郎江遺跡Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 238 集

山手誠治編 1991『辻田遺跡第 2 地点』北九州市埋蔵文化財調査報告書 99 集 北九州市教育文化事業団

山崎純男編 1988『柏原遺跡群Ⅴ』福岡市教育委員会

山村信榮 1998『大宰府佐野地区遺跡群Ⅷ』太宰府市教育委員会

屋山洋 2006「第 28 次調査の記録」『元岡・桑原遺跡群 6』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 909 集

横山邦継 1989『福岡市四箇遺跡』福岡市教育委員会

米倉秀紀編 1998『今山遺跡 第 7 次調査の報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 584 集

米倉秀紀編 2005『今山遺跡 第 8 次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 835 集

吉岡賢生編 2002『山田西遺跡群Ⅲ』那珂川町文化財調査報告書第 59 集

吉留秀敏編 1996『三笠永浦遺跡群』福岡市教育委員会

吉留秀敏編 1991『比恵遺跡群(10)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 255 集